

令和7年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価票（重点事業1）

重点事業1 地域の特色を活かしたアートプロジェクト、他分野とアートの融合、世界の潮流を捉えたアート

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
千葉みなと地域のイベントへの参加、近隣施設等との連携	<イベント参加> ○9月 千葉みなとさんばしまつり ○11月 千葉みなと大漁まつり（館内施設の活用を図る） ○12月 千葉みなと千夜市夜 ○12月 千葉みなとクリスマスマーケット <近隣施設等との連携> ○地域飲食店との連携 ○「没後50年 高島野十郎展」に係る「満月夏まつり」に関する近隣施設との連携（新規）－出店数、来館者数 ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」展に係るMUMA（ミュージアムマーケット）に関する近隣施設との連携－出店数、来館者数	<イベント参加> ○千葉みなとさんばしまつり：開催日：9月7日、内容：ワークショップ：えんぴつであそぼ、参加者数：234人 ○千葉みなと大漁まつり：開催日：11月2日、内容：ワークショップ：県美の建築コラージュ～缶バッチでカラフル★コンポジション、参加者数：133人（うち、有料制作者76人） 館内施設の活用として、ポートパークの舞台に出演する団体（チアリーディング）の控室として和室を利用した。館内トイレを美術館入館者以外にも開放した。 ○千葉みなと千夜市夜：開催日：12月6日、内容：ワークショップ：県美の建築コラージュ～缶バッチでカラフル★コンポジション、参加者数：45人（制作者31人） ○千葉みなとクリスマスマーケット：（天候不良により中止） <近隣施設等との連携> ○地域飲食店との連携（新規） （1）タリーズコーヒー千葉みなと店 ・6月20日～29日：新規フォロー特典：美術館SNSをフォローして、画面提示した方にタリーズで利用できるサイズアップチケットを配布した。 ・8月21日～9月28日：タリーズで該当チラシを取り、美術館でチラシと入場半券を総合受付で提示した方に美術館絵葉書とアイストッピング券を配布した。 （2）軒先珈琲 ①「民藝展」の期間中に休憩室でのスライドトークにおいて、コーヒーを提供（出張販売）した。開催日：5月28日、参加者数：23人、開催日：6月11日、参加者数：23人 ②「没後50年 高島野十郎展」の期間中、ミュージアムショップが閉まる夜間開館時に来店し、コーヒーの販売、展覧会図録や一部グッズ、ドリップパック販売を行った。開催日数：20日、図録販売数：168冊 ○「没後50年 高島野十郎展」に係る「満月夏まつり」の実施（新規）。開催日：8月9日 内容：野十郎作品の中で特に人気の高いテーマの中に「月」があることから、満月の日に千葉県内の小売店が出店・販売するイベントを開催した。 出店数：27店舗 参加者数：95人（スタンプラリー参加者）、来館者数：1361人 ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」展に係るMUMA（ミュージアムマーケット）の実施 第7展示室前と休憩室、みちのにわ（1月のみ）にて、展覧会関連商品や写真やファッション関係の商品を販売するとともに、千葉県内及び千葉県近郊の小売店が出店・販売するイベントを開催した。 ①開催日：11月22日～24日、出店数：22日4店舗、23日5店舗、24日4店舗、来館者数：1795人 ②開催日：1月17日～18日、出店数：17日34店舗、18日41店舗、来館者数：9740人
写真など新しい分野を紹介する展覧会	○写真家サラ・ファン・ライ等を紹介する展示を開催する。 特別展：「オランダ×千葉 撮る、物語る」 会期：11月15日～1月18日	○特別展：「オランダ×千葉 撮る、物語る」 オランダと千葉との文化交流の一環で、オランダの写真家サラ・ファン・ライとダヴィット・ファン・デル・レーウを取り上げ、あわせて千葉の写真家、清水裕貴とともに千葉の古写真のコレクションを紹介する展覧会を開催した。 ・入場者数：5416人（会期49日） ・関連イベント ①アーティストトーク 開催日：11月15日、参加者数：44人、 開催日：12月20日、参加者数：57人、 ②講演会 開催日：12月6日、参加者数：43人、 ③JAZZコンサート 開催日：12月14日、参加者数：228人 ・図録刊行記念トークイベント 清水裕貴×大竹昭子 開催日：12月23日、開催場所：青山ブックセンター、参加者数：22人、 清水裕貴×畑井恵 開催日：1月10日、開催場所：Live Art Gallery、参加者数：18人 ・関連展示 開催日：1月9日～24日、開催場所：Live Art Gallery

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
地域の特色を活かしたアートプロジェクト、他分野とアートの融合、世界の潮流を捉えたアート	千葉みなと地域・地元企業等との連携企画	5回	6回	7回	達成	A	7回	8回	8回	イベント参加数（千葉みなとさんばしまつり、千葉みなと大漁まつり、千葉みなと千夜市夜）3回＋地元企業連携の連携数（タリーズコーヒー、軒先珈琲、満月夏まつり、MUMA（ミュージアムマーケット））4回

3. 自己点検

・本県ならではの自然と歴史・文化を活かしたアートプロジェクトを展開しアートの力で地域の魅力を高め、地域の活性化に貢献することができた。 ・千葉みなとに隣接した立地を活かして、ポートパークやさんばし広場など、近隣施設とのコラボレーション、イベントに積極的に参加し地域の活性化に貢献することができた。 ・連携企画は7回となり、令和7年度の目標である6回を超えることができた。 ・近隣施設等の連携については、自ら連携先を開拓し、成果を納めることができた。 ・美術館として初めて写真分野の展示を実施し、アーティストトークなどのイベントでは、千葉県外からの参加者が半数近くとなるなど、新たな客層を呼び込むことができた。

4. 有識者による評価

【評価】 経済活動、社会活動、文化活動など様々な人間活動が相互に関連しあっている空間の中でのアートを軸としての地域への関与は美術館の重要な役割であり、そのことを認識した上でのR7年度の活動は高く評価できる。美術館として初めて写真分野（特別展「オランダ×千葉 撮る、物語る」）を取り上げ、オランダと千葉を結びつけるコンセプトが効いており、意欲的な展示内容により、県外からの新たな来館者層の開拓に繋がった点は評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 「地域の特色を活かしたアートプロジェクト」として、単に千葉ゆかりの作家等を取り上げるだけでなく、実施によりどのような効果がもたらされたのか、より精緻な内容と波及効果を検証する必要がある。 地域連携を単発的なイベント参加にとどめず、参加者の属性や再来館の有無などを把握し、美術館の新たな利用者層の開拓へ結びつけることが望まれる。「MUMA（ミュージアムマーケット）」等については、継続的な取り組みであることが伝わる名称等の工夫が求められる。たとえば「MuMa 2025」など。 県内にある千葉大学や千葉工業大学、東京大学などの研究機関と接続し、アートと科学を横断する展開への発展が期待される。 重点項目1の中で、「他分野とアートの融合」や「世界の潮流を捉えたアート」と、「地域との連携企画」とが同一のカテゴリーとして扱われていることについても、評価上の整理をより明確にする必要がある。 千葉ポートタワーや千葉市庁舎等の近隣施設と連携し、垂直方向の移動や空間的な回遊性を活かしたイベントの検討など、地域全体を巻き込んだ展開が望まれる。社会連携活動を担う専門チームの編成や人材育成も検討課題である。

5. 今後の活動方針

千葉みなと周辺施設（千葉ポートタワーや千葉市庁舎等）や地域飲食店との連携を継続・発展させ、地域に開かれた美術館のモデルとしてさらなる活性化を目指す。 地域連携の成果を単発のイベント参加にとどめず、波及効果を検証し、新たな来館者層の開拓へと繋げる。「MUMA（ミュージアムマーケット）」等のイベントは継続的な取り組みとして定着を図る。 県内の研究機関（千葉大学や千葉工業大学等）と連携して、アートと他分野が横断する展開について検討する。 これらの社会連携活動を安定的かつ効果的に実施するため、人材育成及び外部の専門人材協力を検討する。
--

令和7年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価票（重点事業2）

重点事業2 房総の美術をはじめとするコレクションの紹介と研究の深化

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
コレクション展示コーナーのス ポット導入	○「コレクション・ハイライト」展の開催による県民ニーズの調査 会期：6月11日～7月13日	○「コレクション・ハイライト」展 会期：6月11日～7月13日（会期29日間） 常設展示を設けることについての来館者アンケートを実施。〈結果〉賛成82%、反対1%、 どちらでもよい17%
企画展・特別展と合わせたコレ クション関連展示の実施	○「民藝展」関連展示 千葉会場限定企画「民藝運動前夜―我孫子時代の柳宗悦 朝鮮美術と白樺派」 会期：4月22日～6月29日 ギャラリートーク、スライドトークの実施 ○「没後50年 高島野十郎展」関連展示「千葉に生きた写実の画家―椿貞雄」 会期：7月18日～9月28日 ギャラリートークの実施 ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」関連展示（特別展出品作品と並列してコレク ションを出展）会期：11月15日～1月18日 ギャラリートークの実施 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」関連展示「県展史の人々―千葉県立美術 館のはじまり物語（仮）」会期：令和8年1月27日～4月5日 ギャラリートーク、スライドトークの実施予定	○「民藝展」関連展示「民藝運動前夜―我孫子時代の柳宗悦 朝鮮美術と白樺派」 ・我孫子時代の柳宗悦を取り上げ、民藝運動と千葉県の関わりを紹介した。 ギャラリートーク、スライドトーク（実施回数8回 参加人数226人） ○「没後50年 高島野十郎展」関連展示「千葉に生きた写実の画家―椿貞雄」 ・野十郎と同時期の草土社で活躍した千葉ゆかりの作家、椿貞雄を紹介した。 ギャラリートーク（実施回数6回、参加人数303人）ワークショップ（実施回数1回、参加者数18人） ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」関連展示（特別展出品作品と並列してコレクションを出展） ・千葉にまつわる写真の歴史に注目し、写真とともに当館のコレクションを紹介した。 ギャラリートーク（実施回数4回、参加人数70人）ワークショップ（実施回数9回、参加者数396回） ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」関連展示「県展史の人々―千葉県立美術館のはじまり物語」 ・神谷が会長を務める千葉県美術会の展覧会（県展）の70年の歴史を当館のコレクションで振返った。 ギャラリートークの実施（実施回数3回 参加人数74人） ワークショップ実施（実施回数1回、参加者数28人）
我孫子と民藝運動、神谷紀雄に 関する調査・研究	○「民藝展」の開催に向けた調査・研究 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」の開催に向けた調査・研究、図録への論 考掲載	○「民藝展」の開催のための調査・研究 〈調査研究〉我孫子時代の柳宗悦の活動や地域との関連性等について、白樺文学館、日本民藝館、 県立中央図書館等で調査を実施 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」の開催に向けた調査・研究、図録への論考掲載 〈調査研究〉作家への聞き取り調査・展覧会出品歴の網羅的調査〈図録〉論考1件を掲載
千葉ゆかりのアーティスト・コロ ニー、大高正人に関する調査・研 究	○コロニー展開催に向けた調査・研究 会期：令和9年4月～6月 ○大高正人展開催に向けた調査・研究 会期：令和9年1月～3月	○コロニー展開催に向けた調査・研究 出展作家の調査：板谷波山について他館3回、板倉鼎について他館1回、柳宗悦について他館3回 ○大高正人展開催に向けた調査・研究 7月6日文化会館見学、8月29日近現代建築資料館調査、11月7日、8日JIA建築家大会参加、 11月11日～13日広島香川調査、12月25日多摩センター駅・南大沢駅調査

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
房総の美術をはじめとするコレク ションの紹介と研究の深化	図録への論考掲載	—	1件	1件	達成	A	2件	2件	2件	「神谷紀雄展」図録への論考
	コレクションに関する体験プ ログラム数	—	6件	32件	達成	A	7件	8件	10件	項目2のギャラリートーク、スライドトー ク、ワークショップ等の合計数

3. 自己点検

・房総の美術をはじめとするコレクションの魅力を伝え、県民の財産であるコレクションの価値向上に貢献するため、コレクションに関する展示を行うとともに、他美術館や外部機関との連携を図りなが ら、コレクシ ョン研究を深化させることができた。 ・常設展示を設けることについて、県民の意見を聞くことができた。 アンケート結果（抜粋） ・常設展示では美術館の特色を知ることができる。 ・いつでも作品を気軽に楽しめる。 ・県の財産として積極的に公開してほしい。 ・常設展は多くの美術館が実施している。 ・学芸員の研究成果を見たい。 ・美術館として、常設展示を設ける方向で検討をすすめるが、展示スペースをどのように確保していくかが課題である。 ・コレクションの保存状態の調査を随時行うとともに、コレクション関連展示に向けてテーマに併せた収蔵作品、作家に関する調査・研究を行った。

4. 有識者による評価

【評価】 地域の美術を紹介することはシビックプライドの醸成において極めて重要であり、近年の調査・収蔵の成果やアウトプットの目覚ましい改善は高く評価できる。 「コレクション・ハイライト」展の開催を通じ、常設展示に対する県民の高いニーズ（賛成82%）を具体的に把握した点は評価できる。館長によって厳選された41点は、香取秀真の《鳩香炉》など、いずれ もそれぞれの作家の代表作が選定されており、今後の常設展のあり方を示唆している。 【今後の課題・アドバイス】 コレクションの価値向上に向けて、短期的な成果のみならず長期的なプランを見据えた研究・展示活動を継続していくことが望まれる。研究成果の発信は、展覧会図録に限らず、講演や研究紀要など多様な 手法を検討すべきである。 常設展は特別展・企画展と相乗性のある体験を提供できるように組めるかが重要である。美術史全体を体系的に見わたす常設展があれば、美術史の特定部分に焦点を合わせた企画展の観覧者に、その部分を 美術史全体の中に位置付けて、とらえるための視点や知見を提供することができるが、県立美術館としては何を指すのかという検討が重要である。 チラシ等の広報物作成にあたっては、デザイン性を保ちつつ、色覚多様性や高齢者等の視認性に配慮したユニバーサルカラーやアクセシビリティへの意識向上が求められる。（重点8にも掲載）

5. 今後の活動方針

県民の財産であるコレクションの価値を高めるため、コレクションのさらなる充実をはかり、日常的な研究成果が活かされる「常設展示」スペースの確保に向けた具体的な検討を進める。 コレクションの保存状態の調査・管理を継続するとともに、短期的な成果にとらわれない長期的な視座に立った研究・展示活動を推進する。 県立美術館として、本来あるべき県民サービスの姿を模索しつつ、コレクションのあり方を考えていきたい。
--

重点事業3 国内外のアーティストとの交流の場の創出

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7 実施内容	R7 実績
ドイツからのアーティスト受入 オープンスタジオ ワークショップ	○アーティストの受入（10月23日～12月17日） ○成果展の開催（12月3日～14日） ○交流会、オープンスタジオ、ギャラリートーク、ワークショップの実施	アーティストの受入事業は、県ゆかりのアーティスト及び関係者との交流を深めるイベントの実施による国内外のアーティストの交流の場の創出のため、また成果展のキュレーション、アーティストトーク・ワークショップの企画運営等による地域住民との交流の場の創出のため実施した。 〈主な業務〉 アーティストの生活環境の整備、調査・制作のサポート、県ゆかりのアーティスト及び関係者との交流を深めるイベントの実施、本事業及び成果展に係る各種広報展開（チラシ類作成、SNS広報、記録動画作成等）、成果展のキュレーション、アーティストトーク・ワークショップの企画運営 ・アーティスト歓迎会 開催日：10月27日、参加者数：28人 ・成果展 開催日：12月3日～14日、入場者数：963人 ・アーティスト・トーク 開催日：12月3日、参加者数:43人、 ・メディア説明会 開催日：12月3日、参加者数：4社5人、レセプション：39人 ・ワークショップ 開催日：12月7日 参加者数：11人

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
国内外のアーティストとの交流の場の創出	国際交流事業に係るイベント参加者等の交流人数	—	50人	54人	達成	A	70人	80人	100人	アーティスト・トーク、ワークショップの参加者合計

3. 自己点検

・国内外のアーティストとの交流の場を創出するため、今年度初めてドイツ・デュッセルドルフ市からアーティストを受け入れることができた。来年度はデュッセルドルフ市へアーティストを送り出すとともに、今後は県内の市町村、企業や他のアートプロジェクトとの連携を検討し、アーティスト交流のハブとなることを目指す。 ・海外のアーティストと共に短期間で展示を作り上げるという経験を通して、異文化間での円滑なコミュニケーションの取り方などの学びを得た。 ・アーティスト歓迎会や成果展オープニングを通じて、県ゆかりのアーティストや県内及び近郊レジデンス関係者、国際交流事業関係者等との交流が広がり、美術館を中心とした文化・国際交流の輪が作られた。 ・成果展、ワークショップ、各種イベントやそれに伴う広報物の確認など、短い期間でこなさなければいけない業務が多く、アーティスト本人の負担が大きくなってしまった。 ・チラシ・案内状の送付を通して外部への事業の広報を行ったが、より広い県民及び関係各所への事業周知が必要だった。
--

4. 有識者による評価

【評価】 創設間もない事業でありながら、ドイツ・デュッセルドルフからのアーティスト受け入れを実現し、歓迎会やトーク、ワークショップ等を通じて集客と交流の場を生み出した実績は、極めて大きな一歩として高く評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 「国内外のアーティストとの交流の場の創出」を本事業の本来の目的とするのであれば、評価対象を国際交流事業に限定する必要はないように思われる。 アーティスト本人の負担が大きくなったという自己点検には留意してもらいたい。また、アーティストや運営側の負担軽減のため、受入施設の規模や滞在期間を考慮し、毎回最大規模で行うのではなく3～5年を一単位とした強弱のある計画を策定するなどの工夫をしてもよいのではないか。 レジデンス事業を今後本格的に展開するにあたっては、制作支援、通訳・翻訳、広報等を担う適切な人材育成や外部協力者の確保が急務である。 交流の対象を一般来館者だけでなく、滞在期間中の他の作家、キュレーター、研究者の訪問へと広げることが期待される。また、千葉大学など県内の美術・デザイン・建築系の大学等と連携し、学生への機会提供を図ることも検討事項として挙げられる。 滞在地ならではの特質がにじみ出る作品制作の支援や、成果展示における「千葉で創作の渦中にある状況」をより強く伝える展示上の工夫が望まれる。 成果物である作品収蔵のあり方も検討すべき。美術館に成果が蓄積されるよう、さらなる制度設計の改善を期待したい。

5. 今後の活動方針

デュッセルドルフ市との交流を継続し、同市のアートシーンとより深くつながり、両者のアーティストが交流するハブとしての機能を強化する。 また、県内の市町村、企業、大学との連携を深め、学生やボランティア等へアーティストとの交流機会を提供する。 アーティストの負担を考慮し、より丁寧な制作支援や通訳等を担う適切な人材・外部協力者の確保を進める。 成果展やイベントについて、より広い県民および他の作家、キュレーター、研究者への周知をはかる。 成果物である作品収蔵も視野に入れていきたい。
--

重点事業4 アーティストやボランティアと子どもたちの出会いの場・創作体験の機会を創出

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
夏休み期間、子どもたちにアトリエ開放	○「ぐるぐる？アート夏やすみ」期間中のアトリエ開放（新規） 期間：7月19日～8月31日	○「ぐるぐる？アート夏やすみ」期間中の「県美でアートな宿題しない？アトリエ（新規）」 期間：7月19日～8月31日(38日間)、参加者数：264人（累計）、ボランティア参加者数90人(累計) 来館した子どもがふらっと立ち寄り、絵具を使ってアトリエから見える風景を描いたり、自由に制作できるようにした。8月中下旬には、絵画コンクール用の画用紙を持ち込んで絵の宿題で数回通う親子も見られた。また、不登校気味の子どもや特別支援を受ける子どもの居場所になっていることもあった。ボランティアはいつでも来た親子を受け入れ、場合によっては用具を貸し出したりして制作のサポートを行った。
アーティストによるワークショップ	○「ぐるぐる？アート夏やすみ」や「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」におけるアーティストによるワークショップの実施	○「ぐるぐる？アート夏やすみ」 千葉ゆかりの若手アーティストによるワークショップを実施した。 ①TOMOMI氏「からだとドローイング」開催日：7月19日 参加者数：34人 第7展示室いっぱいに広げた白い紙の上に裸足で乗って自由に線を描きながら、身体を使って表現するアートを楽しんだ。 ②仲村浩一氏「砂絵を描こう！」開催日：8月16日 参加者数：34人 ポートパークで採集した砂や、カラフルな砂を用いて、「思い出の風景と私」をテーマに共に創作を楽しんだ。 ③花澤武夫氏「千葉みなとに月が出た」開催日：8月23日 参加者数：33人 「没後50年 高島野十郎展」にちなんで、満月をテーマに、千葉みなとの海岸に打ち上がった漂着物を用いて、アーティストやサポーターと参加者が表現したいものを対話を通じて見つけ出しながら、インスタレーションを制作した。 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」 ①神谷祥子氏「鉄絵銅彩の技法で小皿に絵付けをしよう」開催日：2月28日 参加者数：28人 「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」にちなんで、鉄絵銅彩の技法を体験しながら小皿に絵付けをし、作品を制作した。
ボランティアの関わり検討	○ミュージアム・サポーターによる建物探検ツアーやガイドの試行（新規） ○大学生サポーターの継続的な募集（新規）	○ミュージアム・サポーターによる建物探検ツアーやガイドの試行（新規） 建築探検ツアー 開催数：4回 参加者数：60人、 トーク＆ガイド 開催数：21回 参加者数：150人 ○ぐるぐる？アート夏やすみでの参加者対応、運営補助 ○大学生サポーターの数（新規）令和6年度1人→令和7年度6人
小学生向けサポートプログラムの検討	○「ぐるぐる？アート夏やすみ」の実施を通じた次年度以降のプログラムの検討	来館者アンケートでも気軽に参加できるワークショップへの好意的な感想が寄せられた。令和8年度は、建築ツアーなど県美の魅力を発見するプログラムや展覧会鑑賞プログラムと、作品や展覧会につながるワークショップを融合したプログラムの開催を目指す。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
アーティストやボランティアと子どもたちの出会いの場・創作体験の機会を創出	夏休みアトリエ開放への参加者（参加した子どもの人数）	－	30人	264人	達成	A	50人	70人	100人	
	夏休みアトリエ開放への参加者（ボランティアの人数）	－	10人	90人	達成	A	20人	25人	30人	

3. 自己点検

・子どもでも気軽にアートに触れられる環境を整え、子どもたちにアートの無限の可能性を伝え、未来を担う子どもたちの感性を育むため、今年度は「ぐるぐる？アート夏休み」などを実施し、アーティストやボランティアと子どもたちとの出会いの場を創出し、アートを媒介としたコミュニティを形成することができた。
・リピーターも見られ、当初の目的であった「子どもや親子が気軽に美術館に来る」ことが達成された。
・千葉の若手アーティストの手法を用いて子どもたちが制作するアーティストワークショップでは、参加者から「自由度が高く、楽しかった」という意見や「親も楽しかった」という感想があった。またアーティストも、自分が予想していなかった材料の使い方をする子どもの大胆さなどに驚いたという感想があり、互いに刺激を与え合うことができた。
・ボランティアである当館ミュージアム・サポーターの協力により、参加者の子ども達や、保護者・大学生・シニアなど世代をこえた交流が生まれた。
・広報が遅くなってしまったため、終盤や終了後に本事業のことを知った人もいた。本事業の認知度向上が課題として挙げられる。

4. 有識者による評価

【評価】 「ぐるぐる？アート夏やすみ」でのアトリエ開放（「県美でアートな宿題しない？」等）は、子どもたちが気軽に参加でき、不登校児等の居場所にもなる持続可能な環境づくりとして大成功であり、高く評価できる。地域コミュニティのハブとして美術館がふるまえる重要な機会である。ホームページのレポートも、記録としても来年の動員に向けても素晴らしい。 ミュージアム・サポーターによる建物探検ツアーの試行など、ボランティアを巻き込んだ充実した取り組みが評価できる。
【今後の課題・アドバイス】 次世代の育成は当該社会にとって最も重要な課題。アトリエ開放での丁寧な観察から得られた気づきを活かし、「見る」体験と「作る」体験を関連付けるなど、正規の学校教育では実現しにくい学びの場を美術館が担っていくことが期待される。 「夏休みは千葉県立美術館」として定着するよう、継続的な実施と広報の強化が求められる。事業規模の拡大に伴い、教育普及担当者の負担を軽減するための非常勤職員等アシスト要員の配置も検討すべきである。 建物探検ツアーを担うサポーターが自信を持って案内できるよう、建築史や施設の成り立ち等を専門家から継続的に学ぶ機会を設けることが望まれる。建物ツアーに、植栽や野外彫刻、さらにはみなと地区の環境全体についても視野に入れてもいいのではないかと。 障害や多様な背景をもつ子どもへの対応について、現場のスタッフやボランティアに過度な負担がかからないよう、美術館側が主体的に研修や情報共有の機会を設ける体制づくりが必要である。

5. 今後の活動方針

「ぐるぐる？アート夏やすみ」を夏の定番事業として定着させるため、広報の強化を図るとともに、持続可能な実施体制（アシスト要員含む担当スタッフの配置等）を検討する。 アトリエ開放等での参加者との交流から、より深い「見る」体験と「作る」体験を融合させるプログラムを検討する。 コレクションや建築の魅力を発見できる建築探検ツアー等をより充実させる。 美術館のスタッフ、ボランティア（ミュージアム・サポーター）が自信を持って活動できるよう継続的な学びの場を提供するとともに、多様な背景を持つ子どもへの対応に向けた研修や情報共有のしくみを検討する。

重点事業5 多様なニーズや経験の違いに応じた体験プログラム

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
展覧会の理解を深める体験プログラムの実施	○「民藝展」関連体験プログラム 記念講演会を含む計5回 ○「没後50年 高島野十郎展」関連体験プログラム 館長によるファミリーツアーを含む計10回 ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」展関連体験プログラム アーティストトークを含む計2回 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」関連体験プログラム 記念講演会を含む計3回	○「民藝展」関連体験プログラム： 講演会2回（森谷美保氏：美術史家、テリー・エリス氏/北村恵子氏：MOGI Folk Artディレクター） 参加者数：259人、ギャラリートーク 8回 参加者数：226人 ○「没後50年 高島野十郎展」関連体験プログラム 講演会1回（西本匡伸氏：福岡県立美術館特任学芸員）参加者数：195人、 ギャラリートーク 6回 参加者数：303人、 館長によるファミリーツアー 2回 参加者数：13人、ワークショップ 1回 参加者数：18人 ○「オランダ×千葉 撮る、物語る」展 関連体験プログラム 講演会1回（飯沢耕太郎氏：写真評論家）参加者数：43人、アーティストトーク 2回 参加者数：101人、 ギャラリートーク 4回 参加者数：70人、ワークショップ 9回 参加者数：396人 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」関連体験プログラム 講演会2回（神谷紀雄氏：陶芸家、十四代今泉今右衛門：陶芸家）参加者数：212人、 ギャラリートーク 3回 参加者数：74人、ワークショップ 1回 参加者数：28人
アーティスト・ワークショップの実施	【再掲】 ○「ぐるぐる？アート夏やすみ」や「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」におけるアーティストによるワークショップの実施	【再掲】 ○「ぐるぐる？アート夏やすみ」 千葉ゆかりの若手アーティストによるワークショップを実施した。 ①TOMOMI氏「からだとドローイング」開催日：7月19日 参加者数：34人 第7展示室いっぱいに広げた白い紙の上に裸足で乗って自由に線を描きながら、身体を使って表現するアートを楽しんだ。 ②仲村浩一氏 「砂絵を描こう！」開催日：8月16日 参加者数：34人 ポートパークで採集した砂や、カラフルな砂を用いて、「思い出の風景と私」をテーマに共に創作を楽しんだ。 ③花澤武夫氏「千葉みなとに月が出た」開催日：8月23日 参加者数：33人 「没後50年 高島野十郎展」にちなんで、満月をテーマに、千葉みなとの海岸に打ち上がった漂着物を用いて、アーティストやサポーターと参加者が表現したいものを対話を通じて見つけ出しながら、インスタレーションを制作した。 ○「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」 ①神谷祥子氏「鉄絵銅彩の技法で小皿に絵付けをしよう」開催日：2月28日 参加者数：28人 「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」にちなんで、鉄絵銅彩の技法を体験しながら小皿に絵付けをし、作品を制作した。
子ども向けアート体験コーナーの検討・設置	○企画展のテーマに合わせた常設ワークショップの設置	・「民藝展」常設ワークショップ（花を描こう）参加者数：562人 ・「没後50年 高島野十郎展」常設ワークショップ（くだものの置き方）参加者数：1147人 野十郎の静物画作品を出発点に、その配置・構成・モチーフに着目した内容。 ・「オランダ×千葉 撮る、物語る」常設ワークショップ（モノクロの風景に色をかざそう／あなたの眺める風景）参加者数：2118人（計2種類） ・「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」常設ワークショップ（鉄絵銅彩ってなあに？2つの色でコースターをデザインしよう）参加者数：1024人

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
多様なニーズや経験の違いに応じた体験プログラム	展示関連ワークショップ・講演会等の体験プログラムの開催数	年15回	16回	46回	達成	A	17回	18回	20回	項目1、2のプログラム回数の合計

3. 自己点検

・展覧会の理解をより深めるため、様々な経験の違いや世代に応じたプログラムを充実させ、誰もがアートを楽しめる機会を創出することができた。 ・展覧会関連の体験プログラムは、鑑賞に関するもの、ワークショップ等の制作するもの、いずれのプログラムも実施して、展覧会の理解を深めることができた。 ・アーティストによるワークショップを企画し、アーティストと参加者が互いに刺激を得ることとともに、会話等を通して距離が縮まり、アートの理解を深めることができた。 ・子どもたちの展覧会に関する理解を深めるため、子ども向けアート体験として開催した常設ワークショップは、「気軽に参加しやすい」といった感想が寄せられ、また子どもだけではなく大人も楽しんだことがわかる作品も多く見られた。

4. 有識者による評価

【評価】 企画展のテーマに合わせた常設ワークショップをはじめ、多種多様なプログラムを精力的に実施し、幅広い参加者を得た点は高く評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 年齢を問わないプログラムは多いが、「多様なニーズや経験・世代の違いに個々に応じた」プログラムではないように見える。乳幼児と親向け、中高生向け、ビジネスパーソン向け、高齢者・認知症向けなど、それぞれ個別のニーズに特化したプログラムへの挑戦が求められる。 特別展に関連したプログラムだけでなく、美術館のコレクションに対する理解と愛情を深めるための体験プログラム（すでに実施している館長によるトークに加え、特別なゲストによるトーク等）の充実も期待される。 実績46回に対して、次年度以降の目標値が17回、18回、20回に設定されている点については、検討の余地がある。年度ごとの展覧会内容によって実施可能数が変動することは理解できるが、開催数のみを指標とするのであれば、今回の実績を踏まえた目標設定が求められる。今後は単純な回数（の増加）ではなく、プログラムの質、対象者の広がり、展覧会との連動性、参加後の鑑賞行動への接続などを前提に事業を設計し、それらを含めて評価する体制へと発展していくことを期待したい。

5. 今後の活動方針

展覧会への理解を深める常設ワークショップを継続しつつ、多様な世代のニーズを把握し、ターゲットをしばったプログラムも開発・実施する。 特別展だけでなく、美術館のコレクションへの理解と愛情を深めるための体験プログラム（館長トークに加え、特別なゲストによるトーク等）を充実させる。 プログラムの実質的な効果を測るため、参加者の属性（年齢層、初来館・再来館の別など）や、展覧会理解・鑑賞行動への接続を把握する仕組みづくりを検討する。
--

令和7年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価票（重点事業6）

重点事業6 学校教育との連携による美術教育の拡充

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
学校と美術館を結ぶバスの試験的な導入（新規）	○「没後50年 高島野十郎展」と関連した、柏市立の小学校を対象とした鑑賞授業の実施 ○企画展等と関連した鑑賞授業の実施 ○事前出前授業を通じた事業の展開方法の検討	ミュージアムバス事業として、日ごろ美術館所蔵の本物の美術作品に触れる機会の少ない県内の小中学校に、美術館が手配したバスにより来館してもらい、展覧会の鑑賞等を行った。（今年度新規事業） ○「没後50年 高島野十郎展」と関連した鑑賞授業の実施 【ミュージアムバス事業】 柏市立藤心小学校 4年生 34人 実施日：9月24日 内容：展覧会関連トーク＆ガイド ○企画展等と関連した鑑賞授業の実施 ・「オランダ×千葉 撮る、物語る」展と関連した鑑賞授業の実施 【ミュージアムバス事業】 松戸市立第一中学校 美術部 14人 実施日：1月17日 内容：展覧会関連トーク＆ガイド、ギャラリートーク、ワークショップ（館内で、自分の体や影を入れた写真を撮影し、それぞれの写真を鑑賞した。） ・「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」と関連した鑑賞授業の実施 【ミュージアムバス事業】 浦安市立日の出南小学校 5年生 87人 実施日：2月10日 内容：展覧会関連トーク＆ガイド、ワークショップ（解説付の常設ワークショップ） ・「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」と関連した鑑賞授業の実施 【ミュージアムバス事業】 浦安市立舞浜小学校 2年生 87人 実施日：2月13日 内容：展覧会関連トーク＆ガイド、ワークショップ（解説付きの常設ワークショップ） ・「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」と関連した鑑賞授業の実施 【ミュージアムバス事業】 浦安市立入船小学校 特別支援学級（わかしお学級） 19人 実施日：2月20日 内容：展覧会観覧、ワークショップ ・ミュージアムバス事業以外の鑑賞授業を実施した学校：2校（小学校1校、中学校1校） 内容：展覧会鑑賞 ○事前出前授業を通じた事業の展開方法の検討 9月24日に実施した「没後50年 高島野十郎展」と関連した鑑賞授業に係る出前授業を行った。 実施校：柏市立藤心小学校4年生 実施日：7月2日 内容：学芸員による展覧会解説を聞き、高島野十郎ってどんな人だろう？と考えた。 自分で興味をもったことについて探究していく学習の導入を行った。 実施日：9月5日 内容：児童一人一人が調べ学習を通して知ったことや気付いたことなどについてまとめ、ミニ発表会で美術館学芸員へ発表をした。
学校向けプログラムの開発・学校との協議	○教育現場への聞き取りや提案を通じた学校団体向けのプログラムの開発	・学校来館対応にて実施したプログラムや、下見打合せ等で聞き取りを行った。トーク＆ガイド（対話型鑑賞に準じたもの）による鑑賞プログラムとワークショップを希望されることが多かった。建築探検ツアーを希望する学校もあり、令和8年度は県美のコレクションや建物に親しみが持てる内容のワークショップの開発を行う。
教員向け研修コンテンツの検討・学校との協議	○教育現場への聞き取りや提案を通じた学校団体向けの美術館活用方法や展覧会を紹介するプログラムの作成	・ミュージアム事業で来館した学校のうち、事前に出前授業を行っていない学校は、事前に教員との打合せを実施し、事業の内容を伝え、美術館活用方法を提案した。令和8年度は学校団体向けプログラムの開発とともに、その内容を記載した教員向けの美術館利用ガイドを作成する。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
学校教育との連携による美術教育の拡充	学校団体の利用数	5校 (R4～6年度平均)	8校	10校	達成	A	10校	12校	15校	ミュージアムバス 5校 ミュージアムバス以外の鑑賞授業校 2校 その他の学校団体利用 3校

3. 自己点検

・学校教育との連携による美術教育の拡充をはかるため、今年度は初めてミュージアムバス事業を実施した。事前に学芸員が学校におもむき、出前授業を行った場合もあり、鑑賞の理解を深めるとともに、子どもたちと美術館の距離を近づけることができた。
・学校と美術館を結ぶバスの試験的な導入については、小中学校への周知開始が令和7年3月と、学校行事がほぼ確定した遅い時期ではあったが5校が参加した。令和8年度に向けては、学校行事の立案に入る令和8年1月に周知を実施するとともに、美術の教員が集まる会議等でも周知を行う。
・学校向けプログラムについては、これまで実施してきた「彫刻探検ツアー」に加え「建築探検ツアー」を新たに設けることができた。一方で、当館に常設展示室が無くコレクションを常に展示することができないため、コレクションに基づく定番プログラムを組むことが難しい。現在は展覧会ごとに学校向けのプログラムを組んでいるが、今後は、コレクションに基づく多様な学校向けプログラムを開発したい。

4. 有識者による評価

【評価】 ミュージアムバスの試験導入により、県内小中学校の来館を促したことは、全国的にも注目される意義深い取り組みとして高く評価できる。 事前の出前授業と来館時の鑑賞授業を組み合わせた、学習プロセスとしての連携構築が評価できる。また、ニーズ調査から建物探検ツアーへの需要を見出した点も優れている。
【今後の課題・アドバイス】 展覧会ごとにプログラムを作り直す負担を軽減するため、コレクション、鑑賞の基本、素材や表現技法などを軸とした、継続的かつ汎用性の高い「定番プログラム」の開発が必要である。 インクルーシブな姿勢は不可欠である。障害の有無だけでなく、民族や性の差別も越えて広げていく必要がある 学校教員との十分な意思疎通を図り、美術館の利用でどのような学びが得られるかを共同で研究・開発していくことが求められる。 県内の美術・デザイン・建築系の大学や専門学校などとの連携を深め、鑑賞やワークショップに限らず、展示機会の提供や国際交流事業への参加を促すことも考えられる。 今後も予算を確保して継続・拡大していただきたい。交通手段の提供や学校教員へのミュージアム理解の促進は美術館単独では困難な部分もあるため、県によるランドデザインとの連携が不可欠である。

5. 今後の活動方針

「ミュージアムバス事業」の周知を学校行事の立案時期（1月）に合わせて行い、県内小中学校の積極的な利用を促進する。 展覧会ごとのプログラム作成負担を軽減するため、コレクションや建築、鑑賞の基本を軸とし、常設展示の整備を前提とした汎用性の高い「定番プログラム」を開発し、教員向けの「美術館利用ガイド」を作成する。 教員と十分な意思疎通を図り、美術館利用を通じた学びを共同で研究・開発するとともに、県内の大学や専門学校との連携による展示・交流機会の提供も検討する。

重点事業7 資料のデジタルアーカイブ化、SNS等を活用した積極的な情報発信

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
デジタルアーカイブ化	○浅井忠関連300件・コレクション100選関連100件のデジタルアーカイブ化	○浅井忠関連のデジタルアーカイブ化 ・浅井忠が書いた葉書（研究資料）150件の読み下し作業を実施した。 ・浅井忠以外に、作品180件の高精細画像を撮影（作品1点につき約3点カットの画像）した。 ○コレクション100選関連のデジタルアーカイブ化 ・100件の資料情報整理、撮影、解説文、英訳を完了し公開した。
デジタルコンテンツの公開	○コレクション100選のデジタルコンテンツの作成及び公開	・コレクション100選のデジタルコンテンツを作成し、美術館のホームページに公開した。
ホームページリニューアル作業	○コレクション紹介ページにおけるリニューアル作業	・美術館ホームページのコレクションのページを改変し、資料検索やデジタルアーカイブにアクセスしやすくなるよう変更した。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
資料のデジタルアーカイブ化、SNS等を活用した積極的な情報発信	解説・高精細画像等を付したデジタル化・公開点数	—	300点	100点	33%	D	600点	900点	1,300点	
	デジタルコンテンツのアクセス数	—	1,250件	17,727	1418%	A	2,500件 20,000件	3,750件 22,000件	5,000件 24,000件	ホームページ内の「コレクション関連ページのアクセス数」

3. 自己点検

・コレクションの魅力や研究成果をあらゆる人々が身近な環境の中で触れられる場面を創出するため、デジタル技術を活用してオンライン上で公開することができた。
・デジタルアーカイブ化は、浅井の研究資料に関しては目標に及ばなかったものの、浅井以外の作品の高精細画像の撮影（180件）を進めることができた。また、コレクション100選のデジタルアーカイブ化も完了した。
・解説・高精細画像等を付したデジタル化・公開については、現行の情報システムでは高精細画像を公開する性能がなかったため、別サーバーと契約し、コレクション100選については公開することができたが、目標値の300点には及ばなかった。
・デジタルコンテンツの公開については、コレクション100選のページを新たに公開した。
・デジタルコンテンツのアクセス数を評価指標としていたが、数値で把握することが不可能であったため、今後の指標としては、ホームページ内の「コレクション関連ページのアクセス数」へと変更したい。
・ホームページのリニューアル作業については、コレクション紹介ページからの導線を改善し、資料検索やデジタルアーカイブへのアクセスを容易にした。
・現行の情報システムに高精細画像を公開できないことから、「解説・高精細画像等を付したデジタル化・公開点数」の指標は今後もD判定とならざるを得ない。しかし、高精細画像未撮影の作品については、今後も撮影件数を増やしていきたい。また、現行の情報システムに上げられるよう素材画像の加工をすすめ、順次アップしていきたい。同時に、浅井忠の研究資料のデジタルコンテンツも増やしていきたい。

4. 有識者による評価

【評価】 千葉のアイデンティティ確立の核となる浅井忠関連資料の研究や、所蔵品のデジタルアーカイブ化・公開を着実に進めている点は評価できる。 ホームページのコレクションのアーカイブは見やすい。
【今後の課題・アドバイス】 単に高精細な画像を公開するだけでなく、まずは精度の高い言語情報（解説文）や低解像度の画像を先行して公開するなど、利活用の実態に基づく優先順位を踏まえた設計が望まれる。 デジタル化にあたっては、点数の多寡を追うだけでなく、適切な解説作成や英語翻訳の付与など、利用者が作品の価値を十分に理解できる質的側面の充実が重要である。 浅井忠関連資料については、県立美術館以外の作品や資料も参考として総合的に公開・リンクできれば、美術館の存在感がさらに高まると考えられる。 設置者は、デジタルアーカイブ化を継続できる環境（経費、空間、人材）維持を心掛けていただきたい。 デジタル化・公開が美術館にとって重要な目標であり、現行システムがその達成を阻害しているのであれば、まずはシステム自体の改善や変更を求めるべきである。システムの変更が美術館の努力だけでは実現困難である場合には、たとえデジタル化・公開が重要な目標であっても、現行の目標値や評価指標そのものを見直す必要がある。美術館の努力では解決できない要因によって、毎年度低評価が繰り返されるような指標は、評価制度として適切とは言い難い。

5. 今後の活動方針

コレクションの高精細画像撮影を継続して進め、浅井忠の研究資料等のデジタルコンテンツを順次拡充していく。 システムの制約がある中でも、まずは精度の高い言語情報（解説文や英語翻訳等）や低解像度画像の先行公開など、現行システムで可能なことを見極めて、公開実施の計画を推進する。 浅井忠をはじめ当館を代表する美術家の関連資料については、当館以外の作品や資料も総合的に参照できるよう公開・リンク方法の工夫を検討する。

令和7年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価用票（重点事業8）

重点事業8 様々な特性を持つ人々への対応、あらゆる人々にやさしい環境の整備

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
平易な解説文など展示方法の改善・合理的配慮	○合理的配慮の視点での解説文や照明の課題の洗い出し ○改善の実施	・国立アトリサーチセンターの『合理的配慮のハンドブック』やボーダレス・アートミュージアムNO-MA『やさしい美術館ガイド』などを参考にしながら、解説文や照明の課題の洗い出しを行い、今後の方針を検討した。
ガイドシステムの導入検討	○他館の状況確認や専門業者への聞き取り ○令和8年度試験導入に向けた検討	・ガイドシステムについて実績のある数社に、アプリや機器の多言語や音声などの仕様、予算について聞き取りを行い検討を進めた。次年度の試験的導入の際には、ハード機器を必要としない（QRコード活用など）対応による課題の洗い出しをしたい。
施設整備の検討とあわせて館内サインの多言語化の検討・実施	○他館の状況確認や専門業者への聞き取り ○優先度の高いサインにおける多言語化	・様々な特性を持つ人々への対応、あらゆる人々にやさしい環境の整備のため、施設整備については、他館の状況を確認するとともに、専門業者への聞き取りを行った。令和8年度は「みちのにわ」に、ベピーカーや車いす用歩道整備を実施予定。
デジタルコンテンツへの英語解説付与	○「コレクション100選関連作品」での英語解説の付与	・令和7年度公開予定のデジタルコンテンツである、コレクション100選関連の100件については、英語解説を付与した。
触れる彫刻展などのワークショップの実施	○触れる彫刻展でのワークショップの実施 ○令和8年度視覚・聴覚障害を含むインクルーシヴワークショップの内容検討	○・「彫刻に触れるとき－「さわる」と「みる」がであう彫刻展 2026」と「うみのもりの玉手箱 5（障害者の作品展）」との合同展示解説会を実施。 開催日：2月1日、参加者数：30人 ・「彫刻に触れるとき－「さわる」と「みる」がであう彫刻展 2026」の関連シンポジウムを実施。開催日：2月15日、参加者数：20人 ○令和8年度視覚・聴覚障害を含むインクルーシヴワークショップの内容検討 ・令和7年度中は、聴覚障害者のための筆談による対話型鑑賞や、視覚障害者のためのアイマスクを使った対話方鑑賞をミュージアムサポーターと共に試行した。また、他の公立美術館におけるインクルーシヴな取り組み事例を調査するとともに、令和8年度以降に当館で展開したいワークショップ案をリストアップし、内容について精査している。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
様々な特性を持つ人々への対応、あらゆる人々にやさしい環境の整備	障害者等との交流プログラム開催回数	－	1回	2回	達成	A	2回	3回	4回	「彫刻に触れるとき」展と「うみのもり玉手箱 5」の合同展示解説会 「彫刻に触れるとき」展関連シンポジウム

3. 自己点検

・美術館が、あらゆる人々のよりどころになるとともに、日々変化し多様化する社会において、未来につながる持続可能な美術館を目指し、今年度は展示方法、合理的配慮、館内サイン等について他機関等への聞き取りを行った。今後は美術館としての具体的な整備について検討を進めていくとともに、インクルーシヴなプログラムについて充実をはかる。
・展示方法の改善、ガイドシステムの導入、サインの多言語化などについては、調査を進めたが取りまとめに至らなかった。
・今年度公開のデジタルコンテンツであるコレクション100選については、英語解説を付与できた。
・インクルーシヴなワークショップとして試行的に筆談による対話型鑑賞を実施した。引き続き、試行を重ね、インクルーシヴプログラムの充実をはかっていく。

4. 有識者による評価

【評価】 筆談やアイマスクを用いた対話型鑑賞など、アクセシビリティ向上に向けたインクルーシブな実践に着手し、ハード・ソフト両面で着実に取り組んでいる点は高く評価できる。
【今後の課題・アドバイス】 完璧を目指して着手に時間をかけるより、試行錯誤を重ねながら館の特性に合わせた実践を進めることが推奨される。障害の有無だけでなく、民族や性の多様性も視野に入れた総合的なインクルーシブ環境の整備が求められる。 誰もが理解しやすい情報提供として、作品解説文に「やさしい日本語」を取り入れる工夫を取り入れてはどうか。 合理的配慮やアクセシビリティの基本理念を共有するため、館長から警備・受付スタッフに至るまで、全職員を対象とした継続的な研修の実施が必要である。 チラシ等の広報物作成にあたっては、デザイン性を保ちつつ、色覚多様性や高齢者の視認性に配慮したユニバーサルカラーやアクセシビリティを積極的に取り入れる。（再掲）

5. 今後の活動方針

筆談やアイマスクを用いた対話型鑑賞等、インクルーシブな取り組みを引き続き試行・精査していく。 ガイドシステムの試験導入に向けた課題の洗い出しを行う。 作品解説文への「やさしい日本語」の導入検討など、誰もが理解しやすい情報保障に努めるとともに、全職員を対象とした合理的配慮やアクセシビリティに関する研修を継続的に実施する。
--

令和7年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価票（重点事業9）

重点事業9 館全体の施設整備に向けた検討、収蔵環境の整備と作品保全

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
施設整備の検討・調整	○不具合のある設備の洗い出し ○令和8年度設計に向けた準備	・令和8年度以降の施設の修繕に向け、館の劣化度調査の予算を確保した。 ・関係部署と協議し、「展示室及び収蔵庫空調配管工事」を行うことに対し適正判定を得た。 ・「展示室及び収蔵庫空調配管工事」の算定を行い、設計に要する費用を令和8年度当初予算で要求した。
パークとの回遊性向上のための設計・施工	○令和6年度に業者から受けた提案に基づく関係部署とのすり合わせ ○優先順位の高い箇所の施工 ○次年度以降の施工に向けた設計	・関係部署と定期的に会議を開催し、視察や意見交換を実施している。 ・生垣の剪定や千葉ポートパーク案内看板の増設、みちのにわに通路を設置するなど、業者から受けた提案内容や関係部署との意見交換の中、優先順位の高いものから施工した。 ・次年度以降の施工内容について、精査し、具体的な案を検討した。
収蔵庫・展示室の設備改善	○劣化が生じている空調設備の令和8年度設計に向けた準備	・「展示室及び収蔵庫空調配管工事」の算定を行い、設計に要する費用を令和8年度当初予算で要求した。 ・空調機配管の水漏れ箇所については、配管を3月に修繕した。
作品管理要領の見直し	○作品管理徹底のための作品状態の記録方法及び作品管理要領の見直し	・作品状態を記録するための「コンディションカード」の様式を整え、今年度展示した収蔵作品について作品の状態を記録し、コンディションカードを作成した。 ・作品管理要領の見直しのため、近県の公立美術館の規定に係る資料を収集し、管理要領の一部として、定められていなかった閲覧規定を策定した。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
館全体の施設整備に向けた検討、収蔵環境の整備と作品保全	県立美術館の利用満足度「満足している」と回答した人の割合	43.7% (R4)							60%	R10年度世論調査を予定

3. 自己点検

・未来につながる美術館を実現するため、今年度は「展示室及び収蔵庫空調配管工事」について算定を行い、基盤整備に向けて準備を行うとともに、県民の財産であるコレクションを次世代に受け継ぐため、「コンディションカード」の様式を整え、閲覧規定を策定した。今後は基盤の整備を進めるとともに、作品の管理を徹底していく。 ・令和8年度に「劣化度調査」及び「展示室及び収蔵庫空調配管工事」の設計について実施できるよう予算要求を行った。今後も空調配管工事や当該調査の結果をふまえた必要な工事について予算要求を行っていく。 ・パークとの回遊性向上については、業者からうけた提案や関係部署との意見交換の中から、優先順位が高いものを精査し、今年度施工することができた。更に回遊性の向上が図れるよう、引き続き関係機関と連携しながら取り組んでいく。

4. 有識者による評価

【評価】 空調配管工事に向けた準備や、コンディションカードの作成、作品管理要領の見直しなど、来館者の目に見えにくい作品保全や基盤整備の地道な活動を計画的に進めている点は強く支持される。 パークとの回遊性向上に向けた生垣剪定や通路設置など、前倒して環境改善を図った姿勢は高く評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 美術館の社会的機能の一つであり、社会が美術館に委託している役割であることを認識することが重要。老朽化した施設の改善は急務である。 「コンディションカード」の作成を含めた作品管理要領の見直しは非常に重要である。こうした作業には高度な専門性が必要 建設費の高騰に備え、弾力性のある対応方針の策定と、空調工事等に必要予算獲得に向けた論理的な説明の構築が必要である。 館内外の回遊性向上や環境維持のため、植物や野外彫刻の保全に関心を持ち、実践・管理できる内部スタッフの確保・育成が望まれる。手入れの行き届いた環境整備は、美術館の存在価値を広く高めることに直結する。
--

5. 今後の活動方針

建設費の高騰も視野に入れて「展示室及び収蔵庫空調配管工事」等の着実な予算獲得を進める。 コンディションカードの運用や作品管理要領の見直しを実施する。来館者の目に見えにくい収蔵作品の適切な管理・保全活動を粛々と推進する。 館内外の回遊性向上のため、関係機関と連携して優先度の高い環境整備を順次施工するとともに、野外彫刻をはじめ作品保全に努める。

重点事業10 アメニティ設備の整備・充実による魅力的な美術館空間の創出

1. 実施内容および実績

R7実施項目	R7実施内容	R7実績
憩いの空間の整備	○無料エリアにおける常設体験コーナーの設置	・エントランスでのワークショップは原則常設で行うこととした。また、講堂や第7展示室では企画展の開催に合わせ、空間を活用してワークショップを行った。 ・無料エリアで随時ワークショップが可能となるように移動式ワークショップワゴンや作業機を導入した。
レストラン・ショップの設備整備	○レストラン再導入に向けた設備整備 ○ショップの什器や設備の点検及び更新	・レストランの再開については、年度当初公募をかけたが、施設の老朽化等により応募が無かったため、厨房施設の修繕費用を措置した。 ・不定期ではあるが、キッチンカーによる食事の販売を行った。
コレクション関連グッズの開発、レストランメニューの充実	○コレクション関連グッズの開発 ※令和6年度末にレストラン閉店。再導入時にメニューの充実を検討。	・令和6年度に制作した図録『千葉県立美術館コレクション100選』及びポストカード（収蔵作品及び建築）を継続してショップにて販売した。 ・コレクション関連グッズとして、コレクション（香取秀真の鳩香炉）をデザインしたボールペンと、美術館の概観をデザインしたトートバッグを開発し、ショップでの販売を開始した。

2. 評価指標の判定

項目	指標	現状	達成度・判定※（R7年度）				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
アメニティ設備の整備・充実による魅力的な美術館空間の創出	県立美術館の利用満足度「満足している」と回答した人の割合	43.7% (R4)							60%	R10年度世論調査を予定

3. 自己点検

・魅力的な美術館空間の創出のため、今年度は子ども向けの空間整備として無料エリアにおける常設体験コーナーを整備した。 ・レストランの再開については、厨房施設の修繕を令和8年度実施できるよう、予算要求を行った。現在は来館者が利用できる休憩室として活用、レストラン入口に自動販売機を設置するなど利用しやすい状況にしている。 ・コレクション関連グッズの開発・製品化を行い、充実をはかった。
--

4. 有識者による評価

【評価】 子ども向けの常設体験コーナーの整備や、グッズの開発などを着実に進めている点は高く評価できる。 レストラン再開に向けた厨房修繕費用の措置は、美術館の魅力を上げる上で適切であると評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 長時間滞在に欠かせない条件であり、この項目は、利用者満足度と直結している。 レストラン再開にあたっては、都市部の美術館でも運営が困難な事例が多いことを踏まえ、既存の常識にとらわれず、現在の立地や条件において真に提供すべき飲食・滞在機能は何かを多角的に検討することが求められる（若手経営者への期間を限定した委託など）。 飲食メニューやショップのグッズ開発は専門業者に任せきりにせず、学芸スタッフが積極的に関与し、千葉という地域性を活かしつつ、展示体験と相乗効果を生むオリジナル商品を創出することが期待される。
--

5. 今後の活動方針

レストランの再開に向けては、既存の枠にとらわれず、現在の立地や条件において真に求められる飲食・滞在機能（若手経営者への期間を限定した委託等）について多角的に検討し、準備を進める。 コレクション関連ミュージアム・グッズの開発や、レストランが再開した場合の飲食メニューの開発においては、学芸スタッフが積極的に関与し、展示体験と相乗効果を生むオリジナル商品を創出する。
--

令和8年度 千葉県立美術館実施計画 外部評価票（総合指標、総評）

1. 判定

項目	指標	現状	R7年度自己点検				目標値			備考
			目標値	実績値	達成度	判定	(R8)	(R9)	R10	
1 県立美術館の認知度	「知っている」と回答した県民の割合	40.1% (R6)							50%	R10年度文化芸術への意識に関するアンケート調査を予定
2 県立美術館の利用満足度	「満足している」と回答した人の割合	43.7% (R4)							60%	R10年度世論調査を予定
3 年間入館者数	3年間の入館者数の平均	124,902人 (R5~7平均)	105,000人	124,902人	達成	A	110,000人	115,000人	120,000人	R5年121,301人 R6年100,610人 R7年152,797人

2. 自己点検

定量的な目標値は、ほとんどの項目で達成できた。年間入館者数も、令和7年度は140,000人を上回った。今後とも目標値を超える実績を達成できるように努力していきたい。 定量的な成果と同時に個々の活動の内容を充実させることが必要だと考えている。全体の事業のなかで、新規事業を含め、展示室、アトリエ棟などでの活動が大きく拡大した半面、デジタル化事業（画像資料の整備を含む）、学校との連携事業など、目につきにくい活動への注力が十分だったとは言えない。作品・資料の基本的データの整備、作品管理など、研究活動・展示活動の基盤づくりにも取りかかしていきたい。

3. 有識者による総評

【評価】 多岐にわたる活動に対して具体的な計画を設け、年間入館者数などの定量的な目標値を達成できたことは、新体制下での目覚ましい成果として高く評価できる。 数年間にわたる自発的な改革と具体的な事業の実施・評価を重視した取り組みは、全国的にも非常に高いレベルにある。諸活動が活性化し、「千葉県美らしさ」が確立されつつあり、力強いイメージを持つ館へ生まれ変わった点は高く評価できる。 夏休みの子ども向けワークショップやアトリエ開放などが、子育て層の新たな獲得に着実につながり、利用満足度の向上に寄与していると評価できる。 【今後の課題・アドバイス】 目先の数値にとらわれず、長期的なビジョンや日常の理念（建物や庭がどのようなレベルで維持され、千葉県の文化のあり様をお手本として示すか等）を常に確認しながら、事業の質の向上に取り組むことが求められる。 美術館単独での改善が難しい分野（学校との連携、周辺開発等）や専門性の高い分野については、県庁の他部署や他県立施設との全庁的な連携を図り、役割分担の合意形成を行うことが効果的である。 県民の認知度向上だけでなく、既に関心を持つ県外の人々への認知度を上げるアプローチがコストパフォーマンスの観点から推奨される。また、県発信の広報においても、美術館の主体性が見えづらくなならないよう、VI（ヴィジュアル・アイデンティティ）計画を含めたブランディングの構築と広報上の工夫が期待される。 アクセシビリティ向上等のインクルーシブな取り組みは、美術館全体のイメージアップにつながる。館長から受付・警備スタッフに至るまで全員参加の研修等を通じて基本理念を共有し、ソフト・ハード両面で推進することが望まれる。 美術館の社会的な役割として、出張展示や出張講演、サテライト展示など、多様な活動展開が期待される。

4. 今後の活動方針

目に見える定量的成果の達成に努めるとともに、個々の活動内容の質的向上を図る。展覧会活動や普及活動の質を高め、作品・資料の基礎データ整備、作品管理、デジタル化事業、学校連携といった「研究・展示活動の基盤づくり」に一層注力する。 「千葉県美らしさ」の追求とブランディング これまでの取り組みで醸成されつつある「千葉県美らしさ」を確固たるものにするため、中長期的なビジョンを掲げ、VI（ヴィジュアル・アイデンティティ）計画を含めた独自のブランディングを構築し、効果的な広報活動を展開する。 全庁的な連携による事業の最大化 美術館単独では対応が難しい課題（広域的な学校連携、周辺施設との相乗的な開発、サテライト展示等）については、県庁他部署や他施設等と連携し、全庁的な合意形成を図りながら美術館のポテンシャルを最大化する。 インクルーシブな美術館に向けた全館体制の構築 多様なニーズに応える「やさしい美術館」を実現するため、ハード面・ソフト面の両面から環境整備を進めるとともに、全職員を対象とした合理的配慮やアクセシビリティに関する研修を継続実施し、館全体の理念として定着させる。
